

## じん肺の診断基準及び手法に関する調査研究（概要）

平成 26 年度厚生労働科学研究 研究代表者 長崎大学 芦澤和人教授

粉じん作業労働者数は、昭和 55 年に 572,086 人であったが、その後減少傾向であるものの、近年は 45 万人前後で推移しており、毎年 24 万人前後の粉じん作業労働者がじん肺健康診断を受診している。

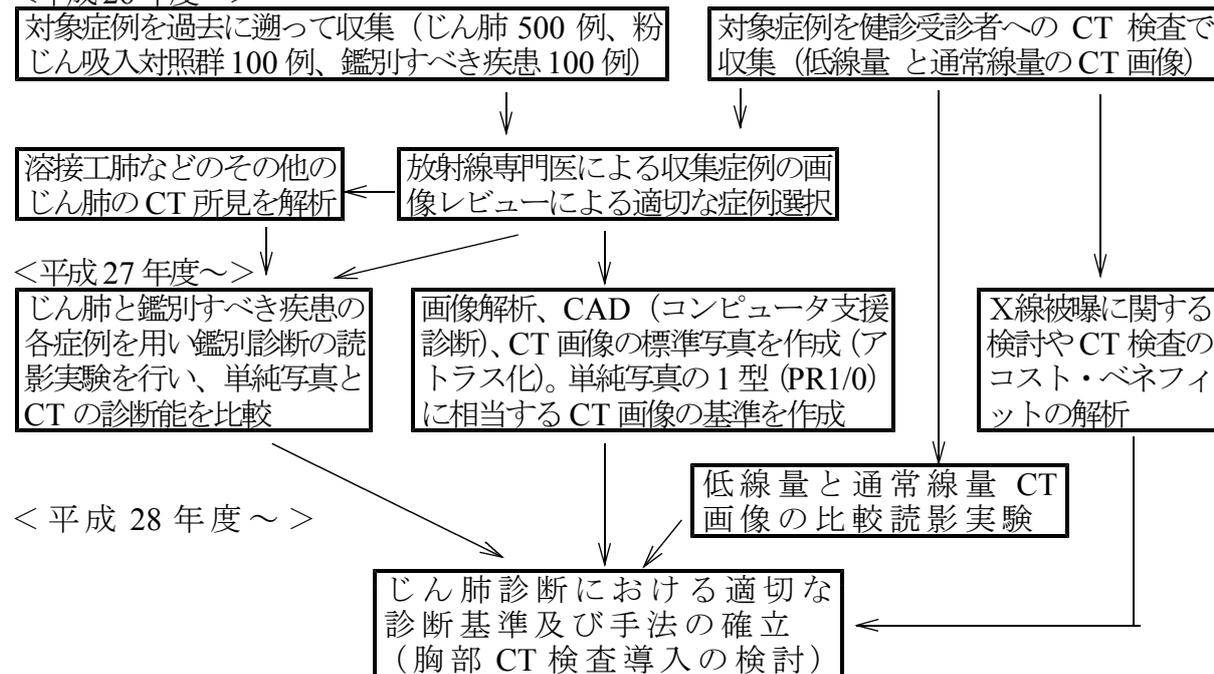
現在じん肺健康診断は、粉じん作業についての職歴の調査のほか、胸部レントゲン写真や胸部に関する臨床検査、肺機能検査等の方法を用い、診断基準に則って行っている。

一方、一般診療における胸部画像検査では、胸部 CT が診断において広く利用されており、じん肺健康診断における胸部 CT の活用促進を求める意見がある。

このような状況の下、平成 22 年 5 月「じん肺法におけるじん肺健康診断等に関する検討会報告書」が取りまとめられ、このなかで「胸部 CT 写真については、検査の普及が進んでおり、またじん肺にかかる CT 写真の国際的なガイドラインが発刊されている一方、放射線被曝量が単純エックス線写真に比べて高いこと、事業者がじん肺健康診断の費用を負担すること、読影技術の普及が必要であることから、現時点において、胸部 CT 写真の検査をじん肺健康診断における検査として位置づけ、全ての対象者に対し一律に検査を行うのは妥当ではない。」とした上で「胸部 CT 写真の取扱いについて、引き続き、必要な情報収集に努めることが必要である。」としている。

このため、胸部 CT 写真でないと適切に診断できない事例の収集・分析など、胸部 CT の有用性を検証し、適切な診断手法の確立を目指すとともに、胸部 CT による被曝リスクに関する知見の収集や事業者の費用負担、読影技術の普及方策について調査・検討することにより、今後の法令改正等の必要性を検討する上での基礎資料とする。

<平成 26 年度～>



○研究計画

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
対象症例収集 収集症例画像レビュー			
鑑別診断の読影実験 画像解析、CAD			
エックス線被曝に関する検討 コスト・ベネフィットの解析			
線量の違いによる比較読影実験			
成果発表 論文作成			